



視点

やってみよう！ やめてみよう！

性教協岩手サークルに入って1年が経ちますが、「えーそうだったの？」と思うことばかりでした。私の間違った認識は、性教育をとて難しく捉えていたことと、「奥ゆかしい対応が日本の大事な文化」だと信じていたことです。実際、私自身も我が子も特にきちんとした性教育を受けないまま大人になり、なんとなくテレビや漫画の情報で「多分こういうことだろう」と特に問題もなく過ごしてきました。そのため、“望まない妊娠”や“性暴力”の被害に遭うかもしれないなんて思いもしませんでした。また、性教育は小学校高学年頃、初潮が始まる頃に始めればよいと思っていたので、乳幼児からの性教育の大事さもわからず、保育者としてやってはいけないことばかりをしていたことに穴があったら入りたい心境です。

全国保育士会で作成した「人権擁護のためのセルフチェックリスト」には「男の子らしく、女の子らしくと大人が固定観念を作るのではなく、多様な選択と自由な発想が尊重されるような保育が望ましい」とあり、私を含め多くの保育者が分ける必要のない場面で「男女」を区別して男の子らしさ、女の子らしさを子どもたちに植え付けてしまっていたことが分かりました。

もう十数年前のことですが、年長組の担任をしていた頃、お遊戯会の女兒の演目で「バラのフラメンコ」をすることになり、バラのイメージで裾に大きなフリルがたくさんついたドレスを当時はカラーポリを使って作りました。女の子たちは目をキラキラさせて、「私のドレスはまだ？」と出来上がりをとて楽しみに待っていました。しかし、一人だけ笑顔が消えてしまった子がいて、理由を聞くと「ドレスを着るのは嫌だ」と言われました。その子はボーイッシュな感じで、男の子たちと走り回っているような子でした。当時ジェンダーの知識などまるでありませんでしたが、その子の気持ちを受け止め、急遽タキシードを作り、宝塚歌劇団のような男役の設定で踊りを完成させたのです。この時、言葉にはできないものの、今まで当たり前に行っていた保育の在り方に疑問の種が残ったように感

じました。

思えば、私たちは「男の子は青や緑、マークシールは車や恐竜」「女の子は赤やピンク、マークシールは花や蝶々」などと不必要な区別をし、「男の子らしく、女の子らしく」を無意識に強要してきたのです。とは言え、このことを直ちに理解して改善することは難しく、現在は小さな工夫を一つずつ重ねている状況です。

「やってみよう」で始めたことは、性教育の絵本や本の保護者への貸し出し、園通信に「性教育の豆知識」を掲載、プールの着替えにパーテーションを使用することです。

逆に「やめてみよう」でやめたことは、入園式や卒園式での呼名の後、男女別の人数を知らせること、名簿を男女別にすること、0、1歳児のおむつ交換を見えるところで行うこと、活動の中で不必要な男女区別をすることなどです。

保育現場ではまだまだ性教育への取り組みは難しい状況ですが、「そんなこと無理」と思って何もしないのか、「できることからやってみよう」「不必要なことはやめてみよう」と小さな一歩を踏み出すかで、保育力も人間力も差が出てくるのではないかと思います。私も含め、経験豊富なベテランの保育者こそ、固定観念が根強くアップデートが必要だと感じています。包括的性教育の必要性が少しずつ認識されてきた今こそ、できることから「やってみたり、やめてみたり」サークル活動を通して学んだことを現場に活かせるような具体的方法を知らせていきたいと思います。そして、「性」について明るく普通に当たり前に話せる時代になることを願っています。



佐藤 裕子

(性教育岩手サークル『おーぼっこ』)

※「おーぼっこ」は岩手ことばで「こども」のこと。岩手サークルのHP参照。